

氏名	臼井洋輔
授与した学位	博士
専攻分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第2029号
学位授与の日付	平成12年 3月25日
学位授与の要件	文化科学研究科人間社会文化学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文題目	「正阿弥勝義と逸見東洋の研究」 —時代の変転が工芸に及ぼす影響について—
論文審査委員	教授 齊藤 孝 教授 稲田 孝司 教授 倉地 克直 助教授 鐸木 道剛 文化女子大学大学院教授 中野 政樹

### 学位論文内容の要旨

まず、この学位論文の体裁は、本論文がA4版ワープロ打ちで1行40字、本文総頁234頁、作品一覧表6頁、正阿弥勝義・逸見東洋の年譜・家系譜・門人譜18頁、註66頁、参考文献一覧1頁、総計310頁。

次いで資料篇として『正阿弥勝義書簡集』がA4版ワープロ打ち1行40字で総計146頁。更に図版として『正阿弥勝義・逸見東洋作品写真集』が付き、これはB4版、手札版写真で73図収録、総頁42頁になっている。本論文は、事実上学位請求のための書きおろし論文である。

#### 序 論

岡山から明治初頭期に輩出し、一定の足蹟を残しながらも、現在はやや忘れ去られているやに思われる正阿弥勝義と逸見東洋の活動と芸術性を、改めて客観的に再評価し、この二人の名を世に出すこと、それと共に、二人は共に備前池田藩のお抱え金工であり、多くは刀装具の制作や鍛刀を行ってきたものであるが、この二人が、西洋化へと向う新時代の中で、豊富な自得の技術を生かして、如何に新しい工芸家へと脱皮して行ったかを問い、それを通じて江戸時代から明治へという時代の大転換期を前にした日本の工芸家たちの在り様に対し、より大局的な見通しを述べたい。と、本学位請求論文の目的要旨を説く。

#### 第一章 研究対象としての近世末～近代初頭の金工と、背後の日本金工の時代変遷

最初にごく簡単に工芸、さらにその中の金工についての定義を述べ、引き続いて日本上代から江戸・明治に至る日本金工史を概説する。

#### 第二章 正阿弥勝義

この章で、正阿弥勝義の全体を詳細にとらえ、彼が池田家お抱え金工時代に修得し、且つ駆使していた実におびただしい金工技術を詳述し、また勝義の作家活動を5期に分け、①第Ⅰ期 天保15年～明治4年(13～40才)お抱え金工時代 ②第Ⅱ期 明治初頭から10年代(40～55才)置物など一般工芸制作への転換期、封建大名というまたとないパトロンを失い、新時代のパトロン獲得に悩む時代、世界万国博出品も手掛け始める。③第Ⅲ期 明治20年代(56～65才)色絵金工への傾斜期 ④第Ⅳ期 明治30年代前半(66～70才)他の追隨を許さぬものから、わび・さびに向う時期、特に倉敷の地

で溝手保太郎という得難いパトロンと結び、彼との関係の中に、臼井氏の言う“粹”の金工に向う。またこの間に勝義は67才で京都に上がっている。⑤第V期 明治30年代後半以降(71~77才)“粹”なものと“わび”たものの完成期。と体系づける。その間、溝手家より発見された勝義の書簡を縦横に駆使して、勝義の制作過程を具体的に詳述し、ことに、勝義は個人制作を行っていたように受け取られていたのが、実はおびただし職種の下請職人の参与によって支えられていた事実を明らかにした。

### 第三章 逸見東洋

この章では、正阿弥勝義と共に岡山より出たもう一人の金工家、逸見東洋について詳述している。そして勝義があくまで金工専門職に生ききったのに対し、元々は池田藩に仕えた刀工であった東洋は、明治以後は家伝の鍛刀で名を馳せるのみならず、木彫・竹彫・漆彫など、多くの工芸ジャンルを一人でこなした万能人であり、天才はだの人物として、勝義とは対称的な人格を紹介していく。また東洋はその万能的な才によって、多分に個人制作的な面があったことを説いている。そして、東洋の作家活動を①刀剣・傑作制作時期(明治4年 25才)②竹彫・傑作制作時期(明治6年 27才)③木彫・傑作制作時期(明治18年 40才)④漆彫・傑作制作時期(明治44年 66才)に分類。また東洋の性格を岡山の風土と結びつけて説こうと試みている。

### 第四章 時代の変転が工芸に及ぼす影響の考察

#### (1) 鎖国から開国への時代の流れ

この時代的大転換が日本の伝統工芸界に与えた衝撃を改めて述べ、明治政府の海外輸出商品として日本工芸の奨励策と共に、金工家自体も伝統的パトロンにたよるのではなく、市場で売れる商品としての生産者に脱皮を迫られる中、万国博覧会に出品を通して欧米人好みの金工を模索しつつも、いわゆる“過飾”の工芸に墮し、多くが時代から忘れ去られていく中において、正阿弥勝義と逸見東洋は、岡山の地から発して、よく独自の光りを放ったことを述べる。

#### (2) 時代の流れに対する二人の対応

第二章と第三章で述べた内容により、改めて二人の性格と価値を比較する。ことに中央の東京に出て名を成した加納夏雄や海野勝珉を加えて明治金工の“四天王”と呼びつつ、加納夏雄らが結局“過飾”金工の域を越えられなかったのに対し、少なくとも岡山の正阿弥勝義は、パトロンである溝手保太郎との協同により、よく“粹”の境地に到達した。と評価する。

### 終章

全体の論旨を改めてもう一度まとめている。

## 学位論文審査結果の要旨

学位審査会は1999年1月27日15時より、学内審査委員4名、招聘審査委員1名によって行った。殊に招聘審査委員の中野政樹氏は、長らく東京国立博物館工芸室の金工担当学芸員を勤められた後、東京芸術大学教授（後、名誉教授）・同大学資料館長らを歴任の後、現在文化女子大学大学院教授兼ふくやま美術館館長であり、日本金工史研究で第一の権威である。

さて、委員の評価は大旨第二章を中心とする正阿弥勝義の研究に集まり、ことに中野政樹氏は溝手家の書簡集にもとづく正阿弥勝義の研究は、ことに臼井氏の独創性と緻密性がうかがわれ、一般に明治の金工史は、中央の東京で活躍した人物を取り上げれば事足れり。とする風がみられる時、これは岡山の地から全国に向けて発信し、今後この方面の研究家に問題を提供するものであろう。特に資料である『正阿弥勝義書簡集』これだけでも逸早い公刊を期待したい。と述べられた。ただ今後の課題として、各章にわたって論旨の重複がみられること、用語の概念規定にも不明確な点が指摘できること、また論旨の一部に臼井氏の主観的解釈がのぞく、などの問題点が多く委員から提出されたが、そのようなマイナス点があってもなお、正阿弥勝義と逸見東洋の二人に対して、かくも部厚な論文にまとめ上げたことは、やはり臼井氏の労作と言うべきであり、そして正阿弥勝義の部分だけを取り上げても十分に学位論文としての価値がある。との総合評価で意見の一致をみた。